

Title	民族・民族性・民族主義：民族主義研究序論
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.12 (1937. 12) ,p.1695(1)- 1741(47)
JaLC DOI	10.14991/001.19371201-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19371201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾 大學講座 經濟學

内容見本進呈

- ▼ 講座科目全三十六科目
- ▼ 特別講義全二十四講座
- ▼ 毎月一回十八ヶ月完結
- ▼ 申込金一圓(終回繰入)
- ▼ 學費一ヶ月一圓五十錢

經濟學とその旁系科學專攻學徒の無二の參考書として全國の學徒に迎へられた本講座は、塾祖福澤先生の遺命を果すべく起つた塾教授團の熱心力こが頁の隅々まで行き渡つてゐる

一ヶ月僅々一圓五十錢の學費と一ヶ年半の短日月を活用することに依つて、現經濟學の最高知識は完全に諸君の有となるであらう

見よ堂々たる内容

第一回講座案内 高橋教授の經濟原論、森嚴精緻なる緒論を経て先づ消費經濟學を講じ、野村教授の日本經濟史は第一篇古代として氏族制度、莊園制度を中心とする教授一流の周到なる論證、寺尾教授の統計學は新しき時代に則したる統計調査及び整理と圖示、グラフの一例として本塾學部別學生數を學示せられたるが如き、如何にそれがカビの生へた舊式の統計學と異なるものがあるかを知られ度い。藤林教授の經濟心理學は前編として經濟生活と心理學、金原教授の金融論は金融の基礎概念と資金の造出を、奥井教授の社會政策は總論として現在社會政策の諸問題と金融論は金融の外に特別講義として戰時財政の基礎知識を養ふべく高木高等部教授の戰爭と財政、平井高等部教授のソヴエト聯邦事情解説の附を以て、現下非常時局に際し必讀の文字である。附録の月刊雜誌「現代の經濟」を、た小泉塾長の講座發刊の附を以て、高橋、加田兩教授の論文等、尋常ジャーナリズムの水準を遙に抜いた學問の高き香を放つものである

三田學會雜誌 第三十一卷 第十二號

民族・民族性・民族主義

— 民族主義研究序論 —

加田 哲 二

第一章 民族の本質

民族主義(または國民主義・國家主義)とは、ナショナリズムの譯語である。而して、民族主義は近代世界史を通じての現象である。民族主義の對立物と考へられ、またその必然的な補足物として考へられてゐる國際主義(インターナシヨナリズム)とともに、民族主義は、近代の世界を動かしてゐる。最近の政治並に經濟政策の傾向として、民族主義が強調せられてゐることは、顯著な事實であるが、國際主義も、特に無産階級運動としてまた資本の國際的流通の一面としての平和主義運動(ブルジョア的)として、極めて有力なものはいふまでもない。而して、研究の對象と

民族・民族性・民族主義

芝二區丁三田一 慶應出版社 電話三二七九番 東京東替振 番〇八一八五

しては、この二つの決定的な主義を、その併存並に關係において、論ずることが現象を正確に理解する上においては、正當な方法と考へられるが、こゝでは便宜上、民族主義のみを論じ、國際主義は、その必要に應じてのみ關説するに止める。

民族とは何かの問題が、民族主義論の前提的出發點でなければならぬ。民族は、しばしば、血縁關係と考へられてゐる。即ち一定集團における同一血統の範疇に屬するものを指すと考へられてゐる。従つて、この場合、民族は一の血縁共同體(Blutgemeinschaft)とせられる。民族を、その血縁の關係において考察するとき、第一に問題となるものは、人種である。

人種とは何ぞやの問題に對して、その本質を科學的に明確に論斷し得ないのが、現在の人種學の状態である。例へば、世界における人種別を問題にしても、ある論者は、白色・黄色・黑色の三大基本人種が存在するといひ、また白色・黄色・黑色・銅色・褐色の五人種に分ち、多いものは三十幾人種に分つてゐる。こゝには皮膚の色をもつて人種的區別の標準として擧げたが、これは一見して、人間の相異が判明するといふ極めて常識的な見地に立つてゐる議論である。單に皮膚の色だけで、人種別の問題は勿論解決するのではない。所謂インド・ゲルマン族についていへば、その原住地たるインドに在住し來つたものの子孫は、その皮膚は黒色を呈してゐるが、その原住地から北上して、スカンヂナヴィアに至り、更らに現在の西歐諸地方に移つたものは、白色である。兩者を皮膚の色に従つて、白色人種・黒色人種と區別することは、その外貌のみを見る非科學的方法である。毛髮・頭蓋・骨格・身長といふやうな

種々な特徴をとつて、人種別を科學的に決定しようといふ方法もある。殊に、頭蓋の形狀を標準にするものが、これまで行はれて來た。即ち頭蓋の縦徑と横徑との比例を算出して、頭蓋指數なるものを設定し、この頭蓋指數の大小によつて、長頭・中頭・短頭といふやうに、頭蓋の形狀から科學的に人種別を設け得るとしたのが、最近までの傾向であつた。勿論この場合、頭蓋の形狀とその他の骨格との比較の如きも問題にしてはゐる。しかし、この科學的人種決定法も、決定的なものでない。それは、第一頭蓋の測定が大數的でないことと、頭蓋の形狀が同一人種と考へられるもの間にあつても、頭蓋指數に大きな差のあることが、しばしばあるので、何處に一人種の頭蓋指數を定めるべきか、甚だ問題であり、その決定方法の如何によつては、甚だしい測定者の主觀が混在し來ることである。また人種を心理的性質によつて區別しようとする方法もあるが、これは、既に觀察者の人種別を前提としての心理的研究であるのと、例へば、能動的(男性的)人種とか、受動的(女性的)人種とかの區別の如きは、甚だ不明瞭であり、近々最近百年間か二百年間のその人種の活動を標準とするのであつて、頭蓋指數による人種決定よりも、尙ほ一層不正確な採るべからざる方法である。

最近では、血液型による決定方法が考案せられたやうであるが、この方法も、まだ確立されてゐない。かう見て來ると人種別決定の方法は少くとも科學的には、大成してゐない。極めて抽象的にいふならば、人種とは、一定の人間集團であつて、何等かの生物學的特徴を共通性として有するものをいふとでも、定義しなければならない有様である。そして、これ以上には進み得ないのが、今日の人種學の大體の状態である。

しかし、世人は、人種別を殆んど本能的といつてもよい位に、感ずる。その區別の標準とするところは、毛髪・皮膚の色・言語・衣服の態様・生活状態などからの判断であつて、生物的・言語的・社會的差異から人種別を云々する。しかし、この人種別の判断は、常識的であつて、科學的なものではない。しかし、かゝる基礎からではあるが、人種別の問題は、その他の問題と關聯して、大なる興味と刺戟とを世人に與へるのである。ムツソリーニは、ドイツの文明批評家エミール・ルドウィヒとの對話の中で、純粹の人種なるものは存在せず、現在の人種は、その殆んど全部が混血であるとし、更らに「人種は九十五パーセントまでは感情である」といつてゐる。この言葉は充分味ふべきものだと考へる。勿論ムツソリーニが九十五パーセントといつたのは、一つの比喩ではあるが、人種別が感情的なものであることは、否定し得べからざる事實である。こゝに一つのエピソードがある。アメリカ黒人が、ニュー・ヨークからシカゴへの急行一等車に乗車しようとして拒絶されたので、彼は、印度人の如く頭部に布を巻いて、インド貴族と稱して、乗車してその目的を達したといふ。これなどは、人種別なるものが、感情の問題であるといふ一の顯著な實例である。

二

民族は、基本社會の一定段階における人口集團であるから、これを血縁關係と全然無關係といふことは出来ない。それは、密接な關係を、人種的形態に持つており、しばしば血縁共同體たることすらある。しかし、民族の本質は、こゝにあるのではない。民族を血縁共同體であると解するものは、民族の人種的形態に重きを置いてゐる。ドイツ

民族は、チュウトン人種に屬し、日本民族は蒙古人種に屬すといふが如くである。しかし、この場合人種において既に混血が行はれてをり、民族に至つては、その血縁状態の純潔・單一を示すものは、殆んどないといつてよい。血縁を民族の偶發的な附隨的要素と見ることは出来るであらう。しかし、最も純粹であると考へられてゐる日本人の如きも、その歴史的過程において、蒙古人種・マレー人種の混成から成つてゐるし、人種の下種概念としての民種としても、支那・朝鮮・滿洲民の混血を形成してゐる。加之、民族は、人種的形態といふが如き、靜態的・固定的概念ではなく歴史的な概念である。而して、一定の社會的歴史的段階において、民族は、單に一定人口・一定領域における固定的集團ではない。それは、生物學的に類型的人間の集團が基本となるとしても、異なる類型の人口を、その内に包含することもあり得るのである。近代國家の帝國主義的發展は、一度形成せられた民族の框を超へて行く場合がある。これは、擴大された民族であつて、その中に異類型人口を包含し、これを固有民族化せんとするものである。かゝる場合、發展する固有民族と支配を受ける異類型人口とが、その政治經濟文化の關係において、兩者がある程度まで綜合的存在となる場合には、われわれは、それを民族の擴大化されたものとし、これを二民族といつてよいと思ふ。かゝる場合人種的・血縁要素は、第二次、第三次的意義を有するに過ぎないのである。従つて、民族をもつて、同一人種的基本社會と考へることは、誤りである。

しからば、民族はそれ自體特色を有する一定の地域内に居住することが、その本質であるか。民族は地縁共同體たることを本質とするか。民族が、その生存の基礎となる自然(國土)に關係のあることは、事實である。普通に民

族は、地理的統一を受けてをり、民族意識の發生を、彼等の生活の基礎である特殊の國土に對する愛着に、負ふところのものがあることは、事實である。何となれば、自然は、人類を養ふ地盤だからである。人類は、自然を離れて生活し得ない許りでなく、それ自體自然の一部でさへある。故に、兩者の關係は、不可分のものと見るべきであるが、しかし同一の國土に生活する集團も、民族を形成するものとは限らず、またその特徴を異する國土に生活するものも、一の民族を形成する場合がある。民族は、かゝる人間と自然との永遠的關係を示すものではない。自然と人間との關係は、生物としての人間が、永遠に擔ふべき運命である。民族は、人間の基本社會發展の一定の段階における現象である。前者は自然現象であり、後者は歴史的社會的現象である。例へば、日本群島に生活する人口集團は、北は千島の果てから、南は臺灣にいたるまで、それぞれ異なる自然環境の下に生活する。この事實は日本民族の形成を妨げるものではない。而して、ハンガリア平原は、これを圍繞せる山嶽と單一な大河流ドナウによつて、眞の地理的統一を具備してゐるのであるが、民族形成に役立たない。かくの如く、同一の自然的環境は、生活の同一傾向を生ましむる基礎として、民族構成の一の條件を供するものではあるが、民族の本質をこゝに求めることは出来ぬ。

しからば、民族は言語共同體としての存在であるか。言語は人間の社會的、即ち集團的生活によつて可能となり、更らにその集團的生活を促進し、緊密化するものであつて、純粹な社會的現象である。同一言語は、同一種民、従つてまた同一地域に居住する集團民によつて用ゐられるのである。故に一基本社會の構成員と言語とは密接な關係

のあることはいふまでもない。普通の場合、一基本社會においては、同一言語が用ゐられることが常である。しかし、このことは必ずしも、基本社會の根本的要件ではない。民族集團の如き廣泛な地域における地縁關係を有するものにあつては、數箇の言語が一基本社會所屬員によつて語られる場合がある。スイスの如きは、その代表的な實例である。彼等は、言語として、フランス語、ドイツ語、イタリア語を語る人々の集合であるが、それは明かにイス民族または國民を形成してゐる。かくの如き例は、他の場合にも多く求めることが出来る。従つて言語は人間集團における必然的現象ではあるが、これを民族の本質として考へることは出来ぬ。

それは ソツクザアル・ゲマインシャフト 宿命共同體であるか。日本國民が日本に生存することは宿命である。われわれ日本人が、日本において生存することは、與へられた事實であり、従つて自然的・宿命的である。血縁を有する人間の集團が、一地域を占めて生存することは、自然必然的である。一定集團の生存は、多くの場合宿命共同體を形成し、その特殊の文化を持つに至る。その意味においては民族も宿命共同體であり、文化 クルツア・ゲマインシャフト 共同體である。しかし民族のみが、宿命共同體であり、文化共同體であるのではない。大凡、すべての社會的集團は、多かれ少かれ、宿命共同體であり、文化共同體である。従つて、宿命共同體であり文化共同體であることは、民族の本質を決定するものではない。信仰の集團としての教會の如きも、文化共同體であると同時に、その信仰の緊密性に應じて一の宿命共同體であり、學校の如きもこれと同種のものである。民族形成以前の人類も種々な集團に組織されてゐるが、それらの氏族・部族・部族聯盟・古代都市國家・中世封建社會などは、いづれも宿命共同體であり、文化共同體であつた。もし、民族の本質を、宿命共

同體・文化共同體とするときは、如何にして、かゝるものと區別し得るかの難問に逢着せざるを得ない。民族は、人類の一集團として、地縁共同體・宿命共同體・文化共同體たる性質を有し、またしばしば血縁共同體たる性質を有する場合がある。しかし、これらの諸性質は、民族の附隨的性質であつて、その本質ではない。

しからは、民族の本質は何處に求むべきであるか。一般に人間集團の本質の認識に當つて、われわれの最も注意しなければならぬ點は、集團の根本的性質を考へなければならぬことである。而して、人間集團の根本的要件は、生存なる事實である。筆者の社會學は、この人間の生存なる事實から出發して、基本社會の概念に到達する。

「基本社會は生活資料獲得を基礎とする人間の包括的社會である。人は、この基本社會によつて自然から各種の生活資料を獲得する。この基本社會の基礎とするところは、生命保持の資料の獲得である。この基本社會を構成してゐる人々は、その一員として何等かの意味において、そこに行はれてゐる生活組織に参加して、自然から生活資料を獲得し、または獲得されたものの配分に參與する。即ち終局において、自然から一定量のエネルギーを獲得する。このエネルギーの獲得には、労働なるエネルギーを人間の側において放出することを要する。……」

かくの如き生活資料獲得のための社會的構成の基礎の上において、一定領域における習慣・傳統・言語が、この基本社會の共通的特質とせられるのである。この關係に照應して、この基本社會を構成する個人は、基本社會成員たるの意識を作り出すのである。この共同意識を作る爲めには、基本社會は一の地域的限界を有する。……」

かくの如く見て來れば、基本社會は人間に對して與へられた一つの事實である。人はその出生とともに、基本社

會の一員となり、その死とともに、その一員たることを脱れ得るのである。彼の生活の一切は、こゝに營まれる。彼の生活の基礎、その制約のすべてはこゝにある。個人はこの基本社會の構成員ではあるが、個人のそれに對する意義は、その構成の根本を動かすほど大ではない。彼は常に基本社會によつて制約せられる。

基本社會は、個人によつて構成せらるゝ集團であるが、それは個人の集團以上の意義をもち、常に人間に與へられたところのものである。即ちそれは恒常的存在である。個人または個人の集團の行動または意志は、個々別々のものであり得るし、間歇的たり得る。而して個人は個人と交渉し、個人と個人とは、また團體を形成することも出来る。かゝる行動の可能性は基本社會の恒常的存在を前提としてのみ考へ得らるのである。故に基本社會は一切の社會的現象の温床であるとともに、その現象の本質を決定するものは、歴史的に與へられた恒常的存在たる基本社會の本質である。(拙著社會學序説 一一四―一二八頁)

かゝる基本社會の本質から民族を見ることが、最も適當のやうに筆者には考へられる。かゝる方法は、人間集團の本質の方向によつて、民族を理解しやうとするもので、民族なる集團の本質への直接の理解である。基本社會としての人間集團は、筆者の分類によれば、原始群團的基本社會・部族的基本社會・古代奴隸的基本社會・封建的基本社會・近代國民的基本社會である。これらは、同時に發展の過程である。そして、基本社會の概念に従つて、人間の生存における共同體の概念であり、従つて、生産共同體の概念である。民族は、この見地から見て一の生産共同體である。これらの諸基本社會はすべて生産共同體であるが、民族もまたその一下種である。従つて、民族を生産共同

體であるとするのは、いまだ民族の本質を決定するものではない。

民族は、かゝる見地から見れば、固定的・自然的概念ではない。民族は實に歴史的概念である。即ち民族は、基本社會發展の一定段階において始めて形成せられる集團である。筆者の基本社會發展段階において、封建的基本社會の後に於いて現はれる社會的集團である。従つて民族の基本社會發展における段階は、近代國民的基本社會と一致する。故に民族は、封建的基本社會が崩壊し、その狭少な封建的基本社會の地域を擴大し、かゝる擴大された地域における統一的集團生活が民族を形成するのである。この生活の基礎は、封建的基本社會におけるが如く、狭少でなく、且つ種々の束縛を受けるものでなく、より一層綜合的な擴大化せられたものである。いま、民族の概念を明かにし、それ以前の基本社會との比較を得る便宜上、プロイドの民族の説明を引用しやう。

「民族、種族及び民族間の差異は然らば何であるか。

氏族、種族及び民族は、人類の經濟的發展の諸種の段階に順應するところの人類社會の種々なる形態である。植物の蒐集、漁獲、狩獵と共に、或る植物の耕作及び動物の馴化——これこそ、氏族の經濟的基礎である。閉鎖的な、自然的な牧畜經濟乃至農業經濟、或は兩者の混合經濟は、種族組織の内容をなすものである。

商品經濟の基礎の上に發達せる交換とそれ以後における資本主義經濟は、人類社會統一の新形態たる民族の存在にとつて、その基礎となるものである。」(プロイド。民族の起原及びその發達 高橋 實譯、五頁)
而して、プロイドは、民族(國民)の發生及び發展の過程を次のやうに跡づけてゐる。

「民族の端緒は資本主義の最初の段階(商業資本主義)が始まるところに、既に見られるのである。……

諸種族間に通商路を設けることの必要及び正確な金銭勘定の保證は、諸法制と慣習の統一を要求し、種族間の疎隔的政治制度を破壊したのである。……然るに商業的相互關係が發達し、商品經濟が發生し、工業資本が形成されるに及んで、これら資本主義の新形態は社會に愈々顯著な地位を占めるところの、資本家階級を創設するに至る。ブルジョアジーの活動圏が大きくなるに従つて、彼は民族統一の仕事に執拗に進める。

ブルジョアジーは封建的經濟の遺訓をぶち壊し、封建諸侯によつて打ち建てられた内部的障壁——割據せる侯國關稅門——を破壊するのである。ブルジョアジーは鐵道や水路の離れ離れの各部を接合して、自身の巨大な社會組織を創設し、労働者農民の廣汎な大衆を革命に引き入れて、封建諸侯政府を自身の階級的利害に隸屬させるか、乃至はそれを廢黜する。ブルジョアジーは彼等が獲得した國家機關を、民族統一のために、強大なブルジョア國家の創設のために利用する。……かくて、資本主義發達の道程は同時にまた民族發展の道程である。……民族は、資本主義の發生し、發展する時及び場所に一致して、發生し發展する。この民族的社會形態は資本主義社會の基礎の上に發展しつゝあるブルジョアジー——凡ゆる民族運動の階級的推進力——の階級的利害に適應してゐることによつて、民族が發生し、發展するのである。」(プロイド、同上書、六一八頁)

民族をもつて、生産共同體といふのは、プロイドが規定したやうな歴史的段階においてある。民族を一の生産共同體として見れば、血縁關係で成立したと考へられてゐる民族國家が、他民族を征服併合したやうな場合におい

て、その實質的な同化過程がある程度まで進めば、それを一の民族として考へることが出来るし、またさう考へられてゐる。かく生産共同體としての民族を理解することによつてのみ、強大民族の他民族に對する征服または平和的侵潤過程を通じての二民族の綜合としての新民族の形成を理解することが出来る。それは優秀強大民族の經濟機構の中に、弱小民族を包含することによつて、その生産共同體の擴大を計るのである。かゝる意味において、私は民族を一の生産共同體として理解する。

第二章 民族性の問題

筆者の立場からいへば、民族の本質を生産共同體とするのであるから、その共同體即ち民族の性格は、生産の歴史的發展の條件によつて決定せらるゝことになる。普通に民族性なるものは、その血縁共同體の性格として理解せられてゐることが極めて多い。血縁と民族とは同義語の如く解せられ、従つて、民族の問題は血の問題として、いひ換れば人種的特性の問題として理解せられる。かくの如き立場が、正確でないことは、前述の所論によつて明かであるが、一應そのいふところを聽いて見よう。この立場を最もよく代表するものは、ナチスの人種理論家達である。その代表的論者アルフレッド・ローゼンベルクはいふ。

「國民社會主義は、國家建設並に國家運営の方法において、特定の民族的特質の現はれを見るのである。もし、他の全く異つた人種——従つて、他の本能——をして、このことに参加せしむるとすれば、有機的表現の純粹性を

變損し、民族的生存を畸形たらしめるであらう。ユダヤの高度金融によつて破壊された社會主義を持つた前世紀の歴史は、このことの悲しむべき一例である。最近數十年のドイツの歴史、殊に、一九一八年以來のドイツ歴史は、この點において一層戰慄すべきものである。

……國民社會主義は、ドイツ語圏内の個々の種族は、互に異つてはゐるが、しかも相互に、近親的人種に屬すること、これらの種族成員の多くの混交は、新しい生命のある文化、多角的な、しかも一のドイツ人を發生せしむべきこと、しかし、ドイツ人と精神的並に身體的構造を全然異にし、敵對するユダヤ的反對人種との混交は、單にその結果として、雜種化を齎らすに過ぎなうことを認める。」(Alfred Rosenberg, *Wesen, Grundsätze und Ziel der N. S. D. A. P.* 1933. S. 18)

このローゼンベルクの立場は、ドイツ國民の血の純潔の問題であり、ユダヤ人種とドイツ民族との混血を排斥することによつて、純粹なドイツ民族の血縁共同體の文化を維持し得るといふにある。従つて、彼の民族問題は人種の問題であり、民族性は人種の外的並に内的(血)特性によつて決定せられる。ナチスの指導者ヒットラーの立場もまたこれである。(拙稿、ナチスと民族・人種問題、日本社會學會年報、社會學第二輯)

このナチスの立場は、民族性の絶對性の主張であり、その歴史性の否定である。民族性の絶對性は、この場合、科學的にも、歴史的にも説明し得ない血の問題である。従つて、ナチスにとつては、ドイツ民族性は、その祖先たるアリヤン人種の「血」とその一分枝としてのゲルマン民族の「精神」に對する絶對的の信念である。従つて、この「血」

と「精神」の絶対性の維持の一方法として、「ユダヤ人」及び「ユダヤ的精神」の排撃が行はれてゐるのである。この場合ユダヤ人種なるものが、何故にドイツ民族性を破壊しつゝあるかの問題は、明かにされてゐないし、またドイツ民族性の破壊を論ずる場合にも、ヨーロッパ大戦後十四ヶ年の共和國時代をいふに過ぎないのである。かくの如きナチスのユダヤ人排斥の行動の意味を歴史的・社會學的に規定することは出来るが、ナチスは、これをドイツ民族性の本質維持とその絶対性とをのみ考へてゐるのである。従つて彼等の主張によれば、ドイツ民族性の本質的決定は、その人種にある。

民族性の本質を人種(血とそれから發生すると考へられる精神)に求めるナチスのドイツ民族論は、その民族の本質の絶対性の主張にあるが故に、二つの缺陷を指示し得る。その第一は、民族性の本源を生物學的概念である人種に求めるが故に、民族性を生物學的本質たる人間體に求めざるを得ざるに至り、人間の身體的特徴である頭蓋骨、毛髪、皮膚の色素關係に求めることゝなれば、かゝる關係における人種概念は、ドイツ民族性の特徴を指示することを得ざる結果となる。従つて、ナチスの論者の尊重するところは「血」である。しかし、「血」を單に物質的な血液と考へるときは、醫學的にA型・B型等の區別を設定するも、もとより正確なものでもなければ、それから精神的なあるものを求めやうとするものでもない。それだけでは、そこに何等の民族的特徴を求めざるを得ぬ。而して、この血液に何等かの精神的文化的特徴を求めるとすれば、それは神祕的性格を有する主張であつて、科學的に證明し得ない。こゝに第一の難關がある。第二は、民族の本質を人種に求め、而して、ドイツ民族の場合、これをアリ

ヤン人種とすれば、アリヤン人種に関する研究が、ドイツ民族の本質を決定するものでなければならぬ。いまアリヤン人種の形成發展に関する説明の權威を求めれば、ルドルフ・フォン・イエリングの『ヨーロッパ人前史』(Rudolf von Ihering, Vorgeschichte der Europäer. 1894)の如きは、その代表的なものであらう。イエリングの説によれば、アリヤン人種なるものは、中央アジアの一地帯に發生し、その一部は北上し、更らに南下して、現在のヨーロッパ地帯に居を占めたものであり、普通に白人と呼ばれてゐる人種を指稱するのである。この説に従へば、アリヤンの特質を有するヨーロッパ人は、現在のドイツ、フランス、イタリー、イギリスに住む人々である。従つて、アリヤンの人種特徴を民族性の本質に算へることは、それ自體ドイツ民族性の否定となるといふ矛盾に陥らざるを得ない。

かゝる點から考察すれば、人種の特徴から民族性を決定することは、困難である。人種とは、生物學的概念であり、民族とは社會學的概念だからである。人種とは、與へられた自然的素材であり、民族とは、歴史的形成的要素である。人種といふ自然的素材が、民族といふ歴史的社會構成體の生物的基礎を構成することは、事實であるが、それは社會の構成者は人間であるといふ抽象的議論においてのみいふことが出来るのである。與へられた人種の種類は、地的環境、雜婚の過程を経て、その生物的外型すらも變形するし、またその精神的要素は、社會構成の要件においてのみ規定せらるゝのである。従つて、民族的性格の規定または構成は、自然的要素としての人種によつて決定せらるゝのではなく、人間共同生活體の發展過程において行はれるのである。私は民族の社會的歴史的生成を

信するものであるから、民族性についても同じやうに考へてゐる。このことを具體的に説明するために、ドイツ民族を研究の對象として、その民族性の歴史性を明かにしやう。

二

ドイツ民族性の研究においては、以上の前提からドイツ民族の形成過程並にその発展の過程において、その本質を求めなければならぬ。ドイツ人なるものは、始めから現在のドイツ地方に居住してゐたのでなく、有史以前にこのヨーロッパ中部の地域に移住したものと考へられてゐる。このゲルマン人は、中央アジアから北上して、スカンディナヴィヤに居住し、そこからドイツ地方、即ちワイクゼル、エルベ兩河畔の北ドイツ地方に移住したものである。それは紀元前六世紀の頃とされてゐる。紀元前三世紀の頃には、ゲルマン人は今日のドイツ領域の殆んど全部に居住してゐた。即ち西はライン河畔に至り、南はポエーメン、メーレンの地方まで及んでゐた。この時代のゲルマン人は東西兩ゲルマン族に分れ、約二十部族に分れてゐた。歴史的文獻において、始めてゲルマン人が記載されたのは、ケーザルの『ガリア戦記』とタシトスの『ゲルマニア』である。前者は紀元前五八年の作であり、後者は紀元九八年の作である。

このローマ人によるゲルマン人に關する著作は、ゲルマン人とローマ人との接觸の結果、前者の指導者によつて著作されたものである。ゲルマン人は當時東はワイクゼル、エルベの河畔、西はライン河、北はノルド・ゼー、南はライン河とザール河とを結ぶ線の間生活してゐた村落共同體末期、即ちその崩壞期の社會を形成してゐた。一方

ローマ人は、既にその世界帝國を樹立し、その社會經濟的基礎を奴隷の上に置いてゐた。ローマ人は、その四方に對する戰爭によつて、多くの奴隷を獲得したが、この戰爭は、また奴隷を失ふ原因ともなつた。かくてローマ人は常にその奴隷を補給するために戰爭し、また植民地を獲得した。イタリア半島を北上したローマ人は、アルプスを越えてライン河畔を下り、ゲルマン人と接觸した。ケーザルは、八年間の戰爭において、よくゲルマン人を征服したのであるが、紀元後八年のトイトブルクの森における戰闘でのローマ軍の敗退は、後のゲルマン人のローマ侵入の因を作つたものといはれてゐる。かくの如き村落共產體の崩壞期における軍事的成功は、ゲルマン人の民族性の一として、「好戰的」だとする論者を生むに至つてゐる。

ゲルマン人が好戰的だといふのは、一の社會的歴史的發展の結果である。ゲルマン人にしろ、また他の部族にしろ、その村落共同體時代から好戰的であるのではない。村落共同體時代の人々は極めて平和的であつて、戰爭の何ものであるかを知つてゐるものは少ない。戰爭は、この時代の崩壞期に至つて社會的原因によつて起るに到つたものである。人はその生存のために自然と闘ひ、また野獸と闘つた。しかし、それは闘争の一形態ではあるが、決して戰爭ではない。戰爭は、社會的不平等の成立による武力階級の成立とも始まつたのであつて、この段階に至つては、他の領域の住民と接觸のあるところ、時として戰爭が主として社會經濟的原因によつて起されるのであつて、その點については、殆んどすべての國の住民についていふことが出来るのである。従つて、ゲルマン時代のドイツ人を好戰的であり、その子孫である今日のドイツ國民も、その故に好戰的であるといふことは出来ぬ。即ちゲ

ルマン人の好戦性は先験的に決定せられたものではない。

筆者の解する意味における民族としてのドイツ民族の構成期は、その統一國家形成運動の時代からであるといふことが出来る。即ち第十八世紀末にフリードリッヒ大王のプロイセン絶対王制の建設から始まつて、プロイセン王國を指導者とするところの統一國家運動である。この運動の初期に當つて、プロイセンはナポレオンの鐵蹄下に蹂躪せられた。ゴットフリード・フィヒテがその『ドイツ國民に告ぐ』といふ講演によつて、ドイツ人を鼓舞したのは、實にこのナポレオン征服下におけるベルリン大學においてであつた。ドイツ解放戦争は、かゝる思想によつて鼓舞せられたドイツ政治家によつて、ナポレオンのロシア遠征の失敗を機會に起された。而して、ドイツ關稅同盟の締結、フライヘル・フォン・シュタイン・ハルデンベルクの改革を経て、プロイセン國家を中樞とするドイツ民族の形成運動が進展した。一八四八年の革命時代には、フランクフルト・アム・マインに國民議會の招集があつたが、いまだ奧太利の指導を打破することを得ず、且つ地方小政權の頑強な獨立維持のために、この統一事業をなすことを得なかつた。この統一事業は、始めてビスマルク公によつて成し遂げられたのである。一八六六年の普墺戦争、一八七一年の普佛戦争によつて、この民族形成が完成された。

ドイツは、その領域に幾多の封建的王侯國が蟠居してゐて、言語信仰などを同じくしてをり、またその形式的な國家としての神聖ローマ帝國が形成せられてゐたにも拘らず、一の民族に形成せられ、發展せらるゝことなくして第十九世紀に及んだのであり、従つて西歐諸國における民族形成よりも、その時期が後れてゐる。即ちドイツは、

英佛などよりも遅れて、民族形成の段階に進んだのである。この民族形成における後進性の爲に、これを促進する手段としての政治的方法が必要となるのである。この政治的方法の第一は、その領域内における統一化的方法、即ち封建的拘束の打破に對する上からの政治的促進である。シュタイン・ハルデンベルクの改革・關稅同盟の結成・ドイツ鐵道網計畫・産業保護主義の政策などがこれである。

而して、政治的方法の第二は、對外關係における方法である。この方法は普通に外交と戦争とに現はれてゐる。ドイツの場合重要性を持つてゐるのは、戦争である。クラウゼヴィツのいふやうに、「戦争とは、他の手段をもつてする政治である。第十九世紀の初葉からドイツ殊にプロイセンの遂行した戦争は、民族形成の政治的表現に異らない。ナポレオンに對する解放戦争にしても、ナポレオンはドイツ領域に對して、フランス革命の原則を遂行して、近代國家への道を拓いたものであつて、その限りにおいては、ドイツの民族形成に貢献してゐるとはいへ——他國の政治的支配に對する獨立性の獲得は、民族形成の一の必要な段階であるからである。一八六六年の普墺戦争は、ドイツ民族形成における普墺兩國のヘゲモニーの争奪戦である。而して、このプロイセンのドイツにおけるヘゲモニーを確立し、フランスからドイツ人の居住地としてのエルザス・ロートリンゲンを奪つてドイツ民族の形成をほゞ完成したのは、普佛戦争である。一八七一年セダンにナポレオン三世を敗つたビスマルク・モルトケの軍は巴里に城下の盟を結んで、ヴェルサイユ城内でドイツ帝國の生誕を宣言した。これがドイツ民族形成のシクナルである。

かくの如く民族形成において遅れて登場したドイツはその政治的促進手段としての戦争をも必要とした。ドイツ民族の好戦性といはれるものは、かゝるドイツ自體の社會的政治的必要によつて生れたものであつて、ドイツ人自身または、その先祖傳來の好戦性ではない。その證據には、英國人またはイギリス民族は平和的と稱されてゐるが、二律背反的な言葉であるが、もし英國民を平和的とすれば、これ位、好戦的な平和性はない。イギリスが商業的發展の過程において、諸國に行はれたと同様に、商業と海賊行爲を同一視したことは、商業的好戦性といふべきであるし、またその植民大帝國を建設するに當つて、幾多の流血の戦争を敢えてしてゐることは、近世植民史をよむものゝ、何人も否定し得ないところであらう。ドイツ民族の好戦性については世界大戦當時大いに論ぜられたが、それは戦争遂行の徹底性にあつたやうに考へられる。それは、一の戦略であつて、民族性ではない。クラウゼウィツが戦争の目的を敵の勢力の殲滅にありとしてゐることについては、他國の戦術家も、またこれを承認してゐる。例へばフランスのフォッシュ元帥の『戦争論』の如きもその一例である。従つて、戦争方法の如何は好戦性の決定にはなり得ない。

三

ドイツ民族性における特性として、しばしばその全體主義・國家主義が擧げられる。ドイツ民族の政治的性格の主たる様相は、現在までの發達において、そこにありといふことが出來やうと思ふ。故に、ドイツ社會思想史家パウ・モンベルトはドイツ思想の特徴を全體主義に求めてゐるし、現在のナチス理論家の如きは、これをドイツ國民思想の中樞的要素としてゐる。ドイツ思想史・政治史・經濟政策史などを、その歴史的現象の表面においてのみ理解するものは、かく主張するであらう。

しかし、このドイツの全體主義または國家主義は、ドイツ民族のみの特有物ではない。それは、ドイツ民族の形成の後進性に由來するものである。近世初期から民族形成の過程に入り、第十八世紀には既に民族形成を完成したイギリスなどでは、その民族形成において政治的勢力の作用が重要性を持つてゐたのであるが、民族の發展の主要勢力が政治権力者になく、市民的階級にあつたので、政治は單にこの市民的階級の安全保護を任務とすれば足るのであつた。ここに、市民的社會を基調とする民族發展の自然的過程がある。この自然的過程を辿るものは、急速にその民族の形成を達成し得ない。而して、このイギリスの民族形成の自然的過程に對照的なものはドイツである。

既にドイツ民族の好戦性について述べた場合に、筆者は、その政治的促進方法を擧げた。この政治的促進方法の所産がドイツ全體主義または國家主義である。イギリスの場合、近世的アプソリュティズムの政策であるマアカンテイルズムの政策によつて、市民的社會が一定段階にまで發展したとき、それは市民的社會の發展に對する一の拘束的要素と化し、市民的社會は、この拘束的要素を排除して、自らの發展を求めざる思想的根據として、個人主義を採用した。故に個人主義はアングロ・サクソンの生物學的特性ではない。それは、時代の要求に過ぎなかつたものである。ドイツの場合には、かかる自然的過程を経過することは、その領域の國際的地位と歴史的事情が、これを許さなかつた。第十八世紀のドイツにおいては、僅かにその後半フリードリッヒ大王のプロイセンが、絶對王制國

家を形成したのみであり、尙ほ多くの封建的王侯が、地方的支配権を把握してゐた。第十九世紀においても、その社會經濟生活の後れてゐたドイツでは、その封建的勢力は可成強力であつた。しかし、封建的分立政權の散在の様相では、既に民族國家を形成し終つた英佛に對抗することが出来なかつた。而して、英佛における民族國家の形成は、市民的革命を通じて行はれたことは、當時のドイツ人の眼のあたり見たところである。ドイツの先覺者達は、この革命、殊にフランス革命を見つめてゐた。ケエニヒスベルクに蟄居してゐたカントも、この革命に深い關心を持ち、フィヒテは、この革命の讚美者でさへあつた。彼等は、この革命の暴力的政治には、眉を擧げてゐたが、この革命の持つてゐる原理をも嫌つたのではない。彼等は、この原理の平和的實現をさへ欲したのである。カントの世界史に關する世界市民的立場からの論議の中には、個人主義に關する理想主義的解釋を見ることが出来るし、フィヒテは自然法の基礎を論じ、國民的契約の立場に立ち、これらを理想主義化して、その『封鎖的商業國家』を書いた。この場合、カント、フィヒテの立場は、個人主義または自由主義における國家敵視的または國家無關心の立場を採つたのではない。彼等は國家によつて、この社會的政治的原理を實現することを期したのであつた。

ヘーゲルに至るとこの傾向は一層顯著であるのはいふまでもない。彼は國家そのものを倫理觀念の實現として、人間結合の最終的理想的形態とした。かくて、彼の哲學に對する保守的解釋は、當時のプロイセン國家——ドイツ民族形成の主要勢力としての——の國定哲學といはれたのである。このヘーゲル哲學は、右翼・中央・左翼の三派によつて解釋を異にしたが、その右翼的並に中央的解釋家はプロイセン國家の官僚と結合し、ここにロレンツ・フォ

ン・シュタインの主張するやうな「社會的王制」の概念が行はれるに至つた。而して、ヘーゲル政治哲學の實踐的形態は、官僚政治であり、民族形成における政治的手段の重要視である。上からの改革・または上からの革命といはれるものがこれである。ここでは市民的社會は、自ら民族を形成するまでに成熟してゐない。この未熟性を醗酵せしめるのに政治的手段が必要であると觀念せられ、それが實行せられるところに官僚政治が行はれる。

官僚政治は、何れの場合においても、その政治的行動の理由または目標を國家に求める。政治は社會關係の一表現であるから、その政治の本體である國家それ自體を、政治の目的とするといふは、意味を爲さないのであるが、政治がある現象を促進せしめる主要動力となる場合には、多くかくの如く考へられる。それが國家主義であり、國家は人間の特定共同體の全體といふ意味で、全體主義と考へられる。故に、第十九世紀の初頭に始まつたドイツの國家主義は、當時のドイツの社會的政治的發展階段における政治の意義に照應した一のイズムであつて、決して、ドイツ民族性の特性といふことは出来ない。

その他面の證明は、國家的思想の批判としての反對思想が輸入せられ、または利用せられてゐる事情によつて提供せられる。例へば、アダム・スミスの例を採らう。スミスの國富論は一七七六年に刊行されたが、その年既に獨逸譯が刊行され、更に二十年を経て、第十八世紀の終りに再び出てゐる。スミス學者なるものも出てゐるし、スミスの經濟學は、ゲッティンゲン大學などで盛に講ぜられた。それは、當時ハノウヴァがまた英王室の所領であつたことにもよるが、後年の自由主義的改革家ハルデンベルクの如きは、ここでその教育を受けたのである。而して、封

建制的束縛の打破に際しては、スミスの學説は多く利用されてゐる。當時ロマンティックの社會思想家アダム・ミュラーが、スミス學説の批判を行つたことはいふまでもない。しかし、スミスにその端を發してゐる自由貿易主義は、一八六〇年代にプリンス・スミスによつて唱道されてゐるが、その支持者はドイツの地主階級であつたことは、多くの人の意外とするところであらう。しかし、それは不思議ではない。英國の自由貿易主義は、その穀物關稅を撤廢することによつて、ドイツの農産物輸出を容易にし、ドイツ側における輸入稅の撤廢は、イギリス工業品の格安輸入をなし得るのであるから、地主階級にとつては、二重の利益であつたから、この運動を支持したのである。かく見て來ると、國家主義とか自由主義とかが、民族性とは何等の關係のないものであり、それは當時の社會的、階級的事情によつて、採否が決定せられることが、判明するであらう。

四

ドイツの國家主義はビスマルク以後においても採用せられ、ドイツ國民の政治的性格は、國家主義的であるといはれてゐる。しかし、政治の國家主義的性格、いひ換へれば、政治の自由主義からの後退は、この時代からの世界的現象である。第十九世紀の八九十年代において、世界の未開地域は多く列強の植民地化した。而して、植民地は商品の販路としてのみでなく、また資本の投下地として取扱はれ、殊に資本の投下地域として、その地域の政治的安定が問題となり、商船に従つた國旗が、更に國旗の後に資本がついて行く様相を呈するに至つた。帝國主義がこれだ。政治の重要性は、この時代には、更に増加した。單に對外的または植民地的關係においてのみでなく、

獨占資本の形成は、國內的にも政治の重要性が倍加したのである。政治の重要性の倍加は、政治の自由主義からの後退であり、後れて世界政治の舞臺に立つた諸國は、自由主義の段階を經過せず、帝國主義の段階に入つた。ドイツの如きは、その最も顯著な例の一である。

ドイツは、輕工業革命において、イギリスよりも、約六七十年を後れてゐて、一八六〇年代に至つて、それを完成したのであるが、更に引續いて重工業の發展を強力に行つてゐる。エルザス・ロートリンゲンの鐵礦とザール炭礦との結合、ルール地方の炭礦は、その原動力であり、第十九世紀の末葉には、先進工業國イギリスに追つかふとしてゐた。一九一四年の大戦は、この産業の發展による英獨世界爭奪の一決算であつた。

大戦後ドイツには革命があつて、ホーヘンツォレルン家は没落して、共和國が成立した。一九一八年から十四年間、ワイマル憲法による共和國が存在した。この時代を多くの論者、殊にナチスの論者は自由主義の時代と呼びそれは、ユダヤ的支配の時代であるといつてゐる。ワイマル憲法の性格は、自由主義的であるといはれてゐるが、それは正確ではない。その起草者フウゴウ・ブロイスは、民主主義者であり、ワイマル憲法の成立事情は、當時のブルジョア的諸政黨とゾチアルデモクラアテンとの妥協である。従つて、この憲法の内容は、自由主義的要素を持つとともに、社會民主主義の要素を加味してゐる。而して、自由主義の要素が特定の政治的自由にあるやうに、社會民主主義の要素としての自由は社會的自由にあるので、この憲法においては、同時に、これらの自由を規定してゐる。而して、この政治的妥協において、社會民主主義は徹底的な社會的並に政治的革命を遂行しなかつたので、

政治上においては、ブルジョア諸政黨の主張するところが行はれてゐた。而して、その主張は必ずしも自由主義的ではない。既にドイツは戦時において、その社會生活、經濟生活において、著しく國家的統制の下に立つた。そして、戦時經濟の體制下においても、一方における著しい利潤の蓄積があり、戦前に到達した獨占資本の段階を、更らに押し進めてゐたのである。しかし、一方において、無産者の革命的勢力は、押し寄せつつあつたので、ここに社會生活における現象的な自由が、緩衝地帯として現はれるに至つた。そして、この緩衝地帯は、戦時戦後において、疲弊し盡したドイツ人にとつては、享樂的方面において、著しく發展する可能性を與へられたのである。しかし、これは單にドイツのみの現象ではなく、英米などにおいても現はれた現象である。しかるに、ドイツにおいては、この自由的享樂が、その經濟的疲弊の結果として充分に行はれ得ない。享樂の自由を有するものは、單に上層富裕者のみであり、中産、無産の社會層は、一層困難な立場に立つた。ここにおいて、ある者——主としてプロレタリアート——は一九一八年の革命の徹底を希望し、他のもの——中間階級——は、帝制時代への復歸を希望した。而して、政治上における諸政黨の妥協政治と國際勢力の壓迫とは、政治上のその日暮しの止むを得ざるに至つた。そこに、二つの極點の對照が現はれた。左翼における共產黨と右翼の代表としてのナチスである。兩者は闘争した。そして、左翼側における戦線統一の不成功はナチスの勝利を容易にしたのである。

ナチスは元來中間階級運動として發展した。その直接の目標はヴェルサイユ條約の打破、即ち外國の壓力に對する祖國的防衛にあつた。このスローガンは、戦敗國としてのドイツにとつては、人氣があつた。しかも、外國の壓力の最も強かつた時代にこれを唱へ、その政權掌握の時にあつては、ヴェルサイユ條約後既に十數年、國際情勢は、最早この條約の改訂または無効を戦勝國においてさへ、承認してゐた時代である。この意味において、ナチスは幸運兒である。

ナチスの他の直接の目標は、共產黨及び社會民主黨の打倒であつた。これは政權把握後、打倒したことは、周知の通りである。しかし、その後の人民投票などに際して現はれる反對または無効投票數は、なほ多數(約百五六十萬)にあることは、ナチスに對する一の悪夢であらう。

しかし現在のドイツ人は大體においてナチスを支持してゐるやうである。これは、ナチス政權が、ビスマルク以來の鐵血主義によつて、馴らされてゐる人民に、同じ鐵血主義をもつて導いて行くからであらう。ナチスは、その政權獲得以來、多くの政敵を拘禁し、または殺してゐる。レームその他のナチス陣營の有力者さへ、その兇刀に仆れてゐる。このことは、ドイツ民族の殘忍性を示すものではない。それは政治的手段の殘忍性を示すものではあるが、支配せられる多數者の性格を示すものではない。これらの諸事件を通じてのナチスの政治的性格は、野蠻性と理想主義との混合であると思ふことが出来るであらう。大ドイツ主義、アリアン人種としてのドイツ民族の純潔性、第三帝國の構成などといふ理想主義的要素は、その政權の維持のための野蠻的手段——殺人・脅迫・ユダヤ人迫害など——と混在してゐる。それは、ヘーゲル哲學の美しい服の下からプロイセンドゥムの劍がガチャついてゐるやうなものである。これらの若い政權把握者としてのナチスの洗練を缺いてゐる點は、文化國の田舎者と呼ばれるドイツ

ツ人の近代約性格に照應したものがあつたのかも知れぬ。

要するに、民族形成過程並にその發展過程におけるドイツ民族は、あまりにも餘裕のない活動をして来たやうに思はれぬ。そしてその活動の根源は何時も、ドイツ民族の政治的手段による發展である。従つて、ドイツ民族は、少數の進歩的分子を除いては、單に國家秩序に對する服従を念としてゐる。そこに、ドイツ民族の保守的理想主義の性格が形成されてゐる。ナチスの如きも、その發展當時における社會主義的主張を、今日においては捨て去つてゐる。それはファッシズム運動の性格ではあるが、その政權把握に際しては、パーベンやフリーゲンベルクの代表する大地主や重工業家と妥協し、その政權把握後數ヶ月にして、國民革命の終焉を宣言した如きは、現在の秩序に對する服従であり、その點においては、運動の性格であることは勿論であるが、ドイツ民族的であるといへる。そこに彼等の保守的理想主義がある。要するに、一民族の性格には先天的なものもあり得ない。それは單に、民族の發展過程において取得せらる後天的要素に過ぎないのである。

以上の如く、民族が社會的概念であり、民族性といはれるものが、民族の發展手段階におけるその性格であつて、民族も民族性も、一つの生物學的概念でないとするれば、民族主義なるものも、それに照應して解釋せられねばならぬ。歴史の示すところは、民族及び民族性が社會的意義においてのみ解釋せらるべきであるから、民族主義もまた當然その社會的意義によつて、説明せらるべきである。民族主義の歴史性は、實は民族の歴史性である。それを理解しなくては、民族主義とその發展過程とを理解し得ない。その意味において、民族主義は、既に古代に存すとい

ふが如き主張は、全然誤謬といはねばならぬ。

第三章 民族主義一般

民族なる歴史的集團現象、及びこの集團を中心とする民族主義の運動は、全然近代的性質を持つものである。民族主義は民族の現象に照應した運動及び思想である。それを一言をもつていへば、一民族または國家中心主義の思想及び運動である。従つて、民族主義は、價值體系における民族の特性の高評價である。民族の特性が唯一絶對のものとして主張しないまでも、文化的・社會的・政治的基礎として、民族を尊重し、これを基礎として、一集團の諸政策・理想を建設せんとするものであり、従つて政治上においては、愛國主義即民族主義の形態を探る。民族の特性を特に尊重し、これを絶對化する場合がある。かくの如き場合には、一民族の價值を絶對と信じ、または、これを誇稱し、他民族の價值を貶稱する。この民族主義は、民族意識を高揚せしめ、しばしば他民族に對する侵略を主張する。この場合愛國心は、好戰主義的傾向を取り、大なる影響を大衆に與へつゝあることは、例へば、イタリー、ドイツの最近の例によつて見ることが出来る。近代の民族主義は二つの意義を持つてゐる。その一は一國の他國に對する獨立といふ消極的意味である。この意味の民族主義は、近世初期における統一的國家又は民族的國家の形成を目標としたものである。即ち一國の他國家に對する獨立、または、諸種族の一民族への統一を意味するのである。かかる民族主義運動は、いまだ民族的主權を確立しない未發達な非獨立的な人口集團の行ふところであつて、民族

的主権を確立し、獨立の民族を形成しやうとする運動であつて、第一に、このために障碍となつてゐる政治機構である封建的貴族制を打破することに努め、第二に、この政治機構を援助し、または、これと同種の政治機構を有する外國的勢力を驅逐することに努める。従つて、また外國的勢力と同意義に考へられる外的人種の排斥運動を伴ふ場合がある。かゝる意味における民族主義は、現代においては植民地または半植民地國家において行はれる。この民族主義運動の中には、植民地または半植民地國家における資本的生産の發展を、その意圖とするブルジョアの民族運動と、被抑壓民族中の無産階級運動としての民族的革命運動——反帝國主義運動——との二つが存在し、その二つの運動は屢々混在した運動として現れる。例へば支那における初期民族主義運動としての國民黨運動とプロレタリアートと貧農とにその基礎を置く民族的革命運動とである。故にこの二つの運動、即ち資本主義國家におけるものと、植民地または半植民地國家における民族主義運動とは、後者に一の革命的要素を含む點において區別されなければならぬものである。而して、植民地または半植民地における民族運動は、これらの地域が被支配的または半被支配的地域であり、かゝる状態における民族運動として、單なる民族獨立運動ではなく、常に帝國主義國家に對立し、抗争する民族運動なる點において、先進國における民族主義運動と區別されねばならぬ。

現代の先進資本主義國における民族主義は、單に一國の他國に對する獨立を意味するばかりではない。それは寧ろその強大な國家を中心としてのその民族的または領土的擴大發展を意味するものである。かゝる意味の民族主義は鎖國主義ではない。それは一の海外發展主義であり、帝國主義である。それは、他國家又は他民族に對する政治

經濟的支配・即ち自己民族化を意味する。この點において、それはある意味の國際的色彩を有してゐるといはねばならぬ。故に現代の民族主義運動は、現在の民族的及び領土的範圍内における自己の發展高揚を目的とすることは勿論であるが、そのみには終つてゐない。それは、自己の民族的支配權の擴張、即ち他民族に對する支配權の擴張を意味する。

この自己民族の擴大化の意味における民族主義は、同時に一國家内における民族の結束・強制的平和を要求する。それは普通にフッパシズムの名をもつて呼ばれるところの民族主義である。フッパシズムは、資本主義的發展の不均衡性の激しいところに起る運動であつて、歐洲大戰後の産物である。それは、國內に對しては、全體主義の名の下に、武裝的階級平和を要求するとともに、その國の資本主義の修正を名とし、これに要する資源及び領域を他國家に要求せんとする侵略的傾向を有するものであつて、獨占資本主義の強化を窮極の目的とするものである。それは、その始源においては、中間階級運動として起つたものであるが、その發展の結果は、獨占資本主義の強化を目的とする運動に轉化する。故に、それは、近世的國民主義とは嚴密に區別されねばならぬ。近世的國民主義は、封建主義に對して進歩的であつたが、フッパシズムは、獨占資本主義の線に沿ふ反動的なものである。

現代のフッパシズム的傾向は、一面において、極端な排外主義を生んでゐる。この排外主義は、自國を絶対視する共通性を持つてゐるが、排外において、外國または外國文化一般を貶稱する一般的立場と、この一般的立場の下に、特定の人種または外的文化を極度に否定するものがある。第二の顯著なる例は、ナチ・ドイツの例である。ドイツ

ツにおける排外主義は、一般に旺盛であるが、特にユダヤ人排斥は、極端であつて、世界の注目を惹いたところである。元來ドイツはユダヤ人問題の近代的本場であるが、最近のナチ運動は特にこの問題について、政治的意味において、絶大の關心を持つてゐる如くである。全世界のユダヤ人とその同情者は、ナチ・ドイツに對して、文化的にまたは、經濟的にこの運動と闘つてゐる。文化擁護運動や、ドイツ商品ボイコット運動は、この問題と密接な關係がある。

しかるに、ユダヤ人は、一の特種の位置にゐる種族型である。それは、最早二千年近く彷徨の民として、諸國民の間に、生活してゐる。ユダヤ人たる種族は存在するが、この種族を基礎として血縁共同體・地縁共同體としての民族は存在しない。それは政治的機關としての自己の國家を持つてゐない種族であり、何れの國家においても、少數種族として、社會的または政治的に、多かれ少かれ、壓迫せられてゐる。この被壓迫状態から脱れて、所屬國家の正當なる一員として、政治的・社會的地位の同一を要求する運動があり、他方ユダヤ人の發祥の地としてのエルサレムにユダヤ人國家を建設せんとするチオニズム(Zionism)運動がある。これは、最も、特異な民族運動である。而して、その運動が、最も多く國際的意義を有する點において、特版を有するので、現在の民族運動として、閑却することは、出来ぬ。

こゝに問題となるのは、現代ソヴェート・ロシアである。ソヴェート・ロシアの政權を把握する共産黨は、マルクス・レーニン主義の立場に立つインタナショナルナリズムを主張するものである。しかるに、その社會主義建設においては、ロシアを中心として實行に移つてゐる。例へば五ヶ年計畫の如きが、それである。一國社會主義建設の可能性の問題は、ソヴェート・ロシアにおいても問題にはなつてゐて、スターリン派とトロツキストの間に非常な論争が行はれ、合同本部・並行本部事件のやうなテロリズムにまで發展しつゝあるのであるが、現在においては、現實のロシアはその方向に進んで行くより外はないであらう。それは資本主義諸國の重圍の中にあつて、社會主義建設をなさんとするものゝ、必然的運命である。而してソヴェートの共産黨の主張が世界革命にあり、萬國の労働者團結せよといふ立場にあり、常に資本主義國において、プロバガンダを行つてゐるだけ、資本主義國との關係は、一小部分を除いては、遮斷されてゐる。ソヴェート・ロシアの指導的理論は國民主義ではない。それは無産者國際主義である。しかも、この無産者國際主義は現時の狀態においては、一小部分のみしか、成し遂げられてゐない。かう考へて來るとソヴェート・ロシアは、事實においては、一の國民主義的立場を強制されてゐるといつてよい。しかしながら、この社會主義建設が現代の國民社會主義(ドイツのヒットラー)と異なることはいふまでもない。殊に國民主義の強調する非階級主義、または傳統主義とは、似てもつかぬものをロシア共産主義は持つてゐる。それは高々強制された國民主義に過ぎないのである。

一方またソヴェート・ロシアの弱小民族の社會主義的革命への煽動を目して、赤色帝國主義、従つて、赤色國民主義であるといふものもある。しかしながら、マルクス・レーニン主義の立場においては、弱小民族の民族自決權を尊重するものであるし、また、弱小民族における共産黨の煽動は、無産者階級に限定されてゐるので、帝國主義的

國民主義とは、その本質を異にしてゐるのである。故に筆者はロシアのイデオロギーである共産主義は勿論のこと、その現實を國民主義として規定しない。従つて民族主義は、その性質に従つて、次のやうに分類せらるべきである。

- 一 近世における民族形成運動としての民族主義
- 二 帝國主義段階における民族主義
 - ファッシズム
- 三 植民地または半植民地における民族主義
 - (イ) 土着資本運動としての民族主義
 - (ロ) 無産階級運動としての民族主義
- 四 ユダヤ民族運動

民族主義論においては、これらの諸種の民族主義を、その歴史的段階において、理解し、その相互關係において、把握することを目的とするものである。第一の近世における民族形成運動としての民族主義は現在においては、歴史的事實であり、現在の問題としては、第二のファッシズムとしての民族主義と第三の植民地または半植民地における民族運動が重要である。しかし、第一の近代民族主義運動は、その後のすべての民族主義運動の原型として、最近のそれを理解するにも、是非これの研究を通過すべきであることは、いふまでもない。

二

民族主義は、以上詳しく述べたやうに、生活資料の資本制的生産を前提とするものであるが、それは、この前提の下における運動であり、その精神的基礎を民族感情または民族意識の上に置いてゐる。即ち、生活資料の資本制

的生産が、民族運動の物質的基礎とすれば、その精神的基礎は、民族意識である。民族意識は、物質的基礎の發展によつて、形成せらるゝものであるが、その發展の過程において意識的にも形成せられる。この意識的形成過程が民族主義運動である。

民族意識の發生の過程は、同類意識の發生である。同類意識は、異類意識の併有によつて、強調せられる。第一に、一種族の他種族との接觸によつて、外に對しては、異類意識が呼び覺まされ、内に對しては、同類意識が起る。而して、他種族に對する接觸は、同一種族及び他種族との一般的接觸を前提とする。生物學的にいふ同一種族の中にあつても、相互に交通交渉の起らないときは、同類意識も異類意識も起らず、接觸が頻繁となるに及んで、その種族的同一性なり、生活内容の同一性なりによつて、同類意識を呼び起すのである。而して、この同類意識の發生から、他種族に對する異類意識が發生するときは、同一種族の同一性による凝集化が起るときである。こゝに對外民族意識の發生の第一現象がある。

民族意識における第二の現象は、他種族に對する異類意識による民族意識の緊密化である。社會生活のあるところ、そこに集團意識があり、社會生活上における集團の勢力及び地位が、集團意識の本質を決定するものであるが、近世的國民社會成立以前の基本社會は、封建的であつて、その中においては、土地並に軍事勢力としての貴族、土地並に精神的勢力としての教會、職業的勢力としてのギルドなどがあり、各々その集團意識を持つてゐた。貴族層的意識・宗教的意識・職業的意識などが、これであるが、一基本社會が、その本質において崩壊し去つた場合にお

いても、イデオロギーは残存する。民族意識は、この残存イデオロギーと闘はねばならなかつた。即ち民族意識は、教會その他の意識と闘はねばならない。この場合、一時代前の意識は、教會意識、ギルド意識などとして、個人的意識として残つてゐるのであるが、民族の形成過程においては、民族意識殊に、その一部を形成する民族理想が、全基本社會組織化する原理として、考へられ、従つて、基本社會の唯一の原理とせられ、社會發展の傾向の線に沿ふてゐる關係上、他の意識が遂に克服せらるゝに至り、民族意識が確立せられるのである。

民族意識の問題と關聯して考へられるものは、民族性の問題である。民族性については、ドイツの場合を例として詳論したので、こゝに多く論ずる必要はない。民族性の問題は、民族構成員の現實的平均的態度について論ぜられず、多くの場合、民族の理想的・典型的態度について論ぜられるのである。こゝに民族性論の客觀性が缺如してゐる場合が多い。而して、われわれは、民族の中に、比較的な統一性と恒常性の存在する事實を認めるが、このことは、單に民族に限らず、一時代、一集團についていひ得る。而してこの民族性は、民族の組織運営する經濟・政治・社會状態によつて、決定せられるものであつて、一民族の特有して、絶對的なものではない。既に指摘したやうに、民族性の特殊性を人種的血液の差異に求めやうとするのは、非科學的であり、證明し得ないところのものである。

三

次に國土の問題がある。民族が地緣社會であるか否かについては、既に論じたが、民族主義者のあるものは、地域並に地域的條件を民族主義の重大な要件に數へる。フランスの民族主義者バリス(Barrès)の如きは、これであ

る。彼は、民族間における闘争において、特定地域における民族の土着性と初期定着の如何の問題を重要とした。而して、國土愛は、根本的には、民族主義に對する倫理的觀念である。種族の複雑してゐる地域においては、國土愛は、相互に競争しつゝある諸種族に對して、結合的要素たるの役割を演ずる。しかし、國土愛が發展する場合、それが盡く民族主義を涵養するとは、限らない。例へば、國土愛が極端に發展するとき、その國土愛は、一集團の生活の基礎である現實的な、眼前的な自然に對する愛着となつて現はれる。而してかくの如き自然は、自己の生活と直接に關係ある極めて狭小な範圍に限られる。こゝでは、國土といふやうな現實的ではあるが、廣汎な抽象的概念によつて、自然は理解せられてゐない。従つて、それは、一の地域主義(Regionalism)となる。地域主義は、一地方中心主義である。従つて、一國全體に對して、民族主義が中央集權主義を意味するのに、地域主義は、地方分權主義を主張する。かゝる點において、民族主義と地域主義とは、相反撥するものである。勿論、民族主義と地域主義とが、矛盾する概念であるとするのは、正確ではない。たゞ地域主義は、熱狂する民族主義に對して、一の制動機(ブレーキ)の役目を演ずるとするのが正しいのである。

地域と民族主義との關係について、尙ほ考察すべき點がある。

それは、民族主義の中心的地域の問題である。第一に、國境地方(National frontier, border region)が問題となる。國境地方は、民族主義に對して、最も關心を惹く地方である。それは、諸民族の接觸地方として、民族主義が注意を怠らぬ地方であり、最も民族主義の宣傳を必要とするところであり、民族主義に對して、生命線(命脈)の要素を持つ。

のである。國境地方は、諸民族の接觸點として、民族に對して、相互的壓力の強く與へられるところであり、民族は、この地方において、一の動的性格が與へられる。即ち國境人口においては、第一に戰鬪的民族主義に走るか、第二に、その所屬民族を變更する傾向を有する。第一の戰鬪的民族主義は、民族的對立によつて涵養せられるが、第二の傾向は、國境人口の二民族語の併用、民族的混交、二民族的生活によつて、養はれる。この第二の傾向は、戰鬪的民族主義者によつて、賣國奴とせられ、かゝる傾向の増大は、民族的對立を激化せしむる。要するに、國境地域は、民族主義の現地であり、従つて、そこでは、一民族の意識を高揚しやうとするものと、國境地域の動的状態に順應しやうとするものとの抗争があり、民族主義が政治的必要に應じて、特に強調せらるゝのである。

國境地域が民族主義の現地的中心點があるに對して、一國の政治・社會・經濟の諸活動の源泉としての首都が重要である。何れの政治上の運動・思想たるを問はず、實際的勢力の獲得は、政治上の地位權力の獲得でなければならず、従つて、政治の中心地としての首都における運動が極めて重大である。殊に民族主義は、一の中央集權主義として主張せらるゝが故に、首都の問題は特に重要でなければならぬ。而して、この國境地方と首都との中間にある地方は比較的これらの地域よりも、民族主義的影響を受けること僅少である。

四

次に民族主義と關係の深いのは、言語である。民族の本質に關する言語共同體説については、既に批評を加へ、その誤謬を指摘したのであるが、言語と民族主義との間には極めて密接な關係がある。集團人口が一定の言語を有す

ることは事實であり、この言語現象から母國語の觀念が発生する。言語は、知的並に精神的なるものの源泉であり、且つ表現である。集團の感情・意志は言語によつて、表現せらるゝのであるが、言語は、人口集團的または地域的に多少の差異を持つてゐる。民族の場合においては、それが最も廣汎な範圍において、統一せられた場合であつて、従つて、それは民族とその文化の本質に對する最も重要な理解の鍵である。民族における感情・一般の感情的生活は言語において、最もよく表現せられるとされてゐる。こゝに民族文學成立の可能性が主張せられる。しかし、言語の場合における地域性は、一の方言(ダイヤレクト)として現はれ、その地方の特性を、この方言において發見し得る。民族と國土の關係を論じた場合に、地域主義について論じたが、方言は一の地域主義であつて、廣汎な範圍に及ぶ統一的言語とは、相反する性質を持つものである。一の民族主義に對する制動作用をなすものである。故に民族主義者は常に、言語の統一運動に従事する。即ち民族内における同一系統以外の言語の撲滅・禁止を主張し、方言の標準語化を主張する。これは一の言語闘争である。

文字についても、同じことがいへる。言語は必ずしも文字を持つものではないが、進歩した言語は文字を持つてゐる。而して、各言語には、特有の文字を有し、書體・字型を持つてゐる。例へば、ドイツ語は、その傳統からいへば、ゴチック文字をもつて書かれ、印刷せられるのである。しかるに近代に及んで、ドイツ語をラテン文字に書く場合がある。それは、一の文字の上における西歐化主義であるが、ドイツにはこのラテン書體を排して、傳統的なゴチック書體を一般に採用せんとする運動がある。これは、ドイツ語における多數の外國語を整理し、これに代用

すべき純粹ドイツ語をもつてせんとするフェルドイチェングの運動と同性質のものである。ナチス政治の下において、ゴチック書體が多く採用せられてゐることは、國民主義としてのナチスが傳統を重要視せんとする一の現はれである。日本における漢字廢止、または制限論・假名文字運動の如きも、これに類するものである。しかるに、わが國においては漢字は支那から輸入したものであるが、既に千數百年の歴史を有するの故をもつて、保守主義者・國家主義者の側に多くの反對論があることは、一の注目すべき興味ある現象である。

五

宗教と民族主義とも、また多少の關係を有する。民族それ自體は、宗教共同體ではないが、宗教は民族におけるイデオロギーの一形態として、民族主義に關係を有するのである。宗教なるものは、原始的基本社會には、種族的宗教として、種族的集團の共同的原理としての地位を持つてゐたのである。それは、多く自然宗教の形態を採つてゐたのであるが、原始的基本社會の崩壊と種族集團の接觸によつて、一神教的超種族宗教を生むに至つた。この時代においては、宗教こそ、知識の源泉であり、精神的文化の基礎であつたので、それは巨大な社會的政治的勢力を持つてゐた。この勢力の背後には、宗教共同體、即ち宗團の土地支配權による經濟力を持つてゐたのであるが、實にそれは精神的支配者としての地位を有したのである。殊に、ヨーロッパにおいては、キリスト教がローマ帝國の國教的地位を獲得してから、ローマ舊教の勢力は確立せられの世界(ヨーロッパ)宗教として、中世を通じて、ヨーロッパの精神界に君臨してゐた。しかるに、宗教改革は、このカソリシズムの地位を崩壊せしめた。プロテスタン

トはこのカソリシズムの世界主義に抗して、ローマ・カソリック教會の支配を制して、各國民國家における宗教の國家または君主に對する隷屬的地位を認めた。國家は宗教をその政治的目的のために利用することを得た。フランス革命直前における急進主義者の間にすら、宗教の利用が主張されてゐるのである。

民族主義の隆盛に赴くに從つて、民族主義それ自體が、宗教化する傾向を持つてゐる。民族主義は、傳統主義的であり、所謂精神的傾向を持つてゐる。従つて、それは、その内に、一祖先崇拜・二家族制度の尊重・三國民的英雄及び犠牲者の稱揚・四國民に對する犠牲的精神及び用意の要求・五傳統主義・七世界における劃一的文化水準に對する否定的態度を持つてゐる。これらの内容は、客觀的檢討を経た後の科學的主張といふよりは、寧ろ確信であり、信仰である。それは、合理主義に同情を持つてゐない點において、既に宗教的素質を持つてゐる。故に民族主義の理解には、かくの如き宗教的態度を研究することが必要である。

六

次に民族主義のプロバガンダについて一言したい。如何なる主義においても、その主義を一般化するためには、種々の手段を用ゐるが、その第一は主義に關する教育である。民族主義の教育目標は、先づ兒童にある。各國に存在するボーイ・スカウト(少年團)の如きものがこれである。かくの如き少年教育は、近時、民族主義的組織を模倣することによつて、社會主義團體などへも、行つてゐるが(ビオニール運動)その本場は、何といつても民族主義的のものである。少年團運動は、團體的訓練であつて、この訓練の間に民族主義的精神を涵養するのであるが、軍事的

スポーツの如きも用ゐられてゐる。軍事教練の如きは、青少年に對して、各國の課してゐるところである。民族主義的精神の涵養に對して重要なものは、小學教育であるが、これは各國において、義務教育とせられ、民族主義的・國家主義的傾向を著しく有するものであり、この傾向は、近時の民族主義・國家主義的傾向においては、中學・高等學校・専門學校・大學へと及びつゝあるといつてよいであらう。現時にあつては、民族主義的教育以外の教育は殆んど異端視されてゐる。

民族主義の組織體としては、協會・俱樂部・團・黨等がある。その他ある組織内に民族主義的侵潤を行ふ場合がある。言語と關聯して、文學の民族主義に對する重要性については、既に説いたが、學術團體・文學團體には、この精神を有するものが極めて多い。またスポーツ團體は、スポーツそれ自身が一の消閑的作用として考へられてゐる關係上、上中層社會に關するものが多く、且つ政治的には、支配者層に隸屬することが多いので、保守的であり、民族主義的である。スポーツ開始時における國旗掲揚の如きは、その一例となるものである。その他一般圖書館における讀書の宣傳・備付書籍の選擇についても、かゝる傾向が多いのは、一般圖書館の經營並に統制上の理由に基づくものである。その他各種の經濟團體を通じて、この種の宣傳はなされてゐる。

新聞は、民族形成時代に發展したものであり、時運とともに動いて行く關係上、民族主義的傾向を持つものである。一般にジャーナリストは自由主義的なのとされてゐるが、それは、その私的生活に現はれた一面のみであつて、その本質として規定すべきものではない。新聞の傾向は、一國の政治經濟の傾向・新聞それ自體の政治經濟的

構成・記者の素質をもつて、決定せられるのであるが、前二者は、その決定的要素であり、新聞が一の商品として大衆の購買を目的とする以上、それは、大衆の一般的傾向に追隨するか、政治的指導階級の統制に服するかであるが、この兩者は必ずしも、相反撥するものではない。教育と宣傳によつて、大衆は、民族主義的であり、政府は、主としてこの傾向を持つてゐるとすれば、新聞の傾向もまた察知するに困難ではない。而して、新聞の宣傳力の大なるは、こゝにいふまでもない。

その宣傳の方法としては、示威運動として、集會・行進があるが、この種のもものは、單に民族主義運動に限定されるものではないが、民族主義運動は、この種の示威運動を極めて派手に行ふことは事實である。この外行爲の宣傳として、また目的貫徹の手段としてテロリズムを用ふる場合がある。それには、放火・暗殺・武裝蜂起などがある。世界大戰以後、殊に現在において、この種の行動の増加は、著しいものがある。

七

要するに、民族主義は、一定民族の價値の自己的高揚であり、その民族の構成する國家を社會生活の最高形態とし、すべての民族的現實と理想とは、この國家を通じて顯現せられると考へるものである。故に民族の生命は、この國家と同一のものと考へられ、民族の生命は、民族の始源において、豫定せられ、歴史の過程において、具體性を得るものとせられる。従つて民族主義は民族の過去に對する深い神話的信仰に基を置き、その將來における顯現を理想とするものである。

民族主義は、その觀念において、一は過去における自己民族の發展の精神に基き、その將來においては、民族的理想及び使命の理念を持つ。この二つの觀念を結合するものは、民族の資性に關する信仰である。従つて、これらの觀念は必ずしも科學的に證明されたものではない。それは、極度に主觀的觀念的な立場に立つものである。かゝる民族の使命理念は、民族發展の理念であり、この民族發展の理念は、民族の量的發展として考へられ、この量的發展とは、民族的使命の地域的發展と考へられる。従つて、民族的使命の理念が、その極點に到達するとき、民族の世界征服または世界統一にまで發展する。この民族的使命の遂行を阻止する他民族の存在が常に豫定せられる。即ち民族の宿命的敵國または宿命的敵民族が、考へられる。かゝる場合、民族主義は、その排外的態度を明確するとともに、自國における國際主義的または自由主義的傾向と闘争する。この傾向の極點は、民族主義と好戰的態度との結合である。民族主義の好戰的態度は、民族意識の初期的段階と民族主義の帝國主義的段階において、最も著しく現はれる傾向である。

民族主義は、民族の形成、その典型的形態としての國民國家の形成時代に意識的に唱道され始めたのであるが、この民族的統一を要求したものは、當時の商業資本であり、その經濟的基礎を一脚として、その上に立つた專制的王侯である。民族主義は、それ以來大體において、かゝるものイデオロギーとして發展して來たものであつて、大體において、資本主義の發展と關聯せるものである。しかるに、資本主義が工業資本主義に進轉し、その基礎を機械工場に置く大量資本制生産の典型的に發展し來つたイギリスの如きにおいては、産業發展のための政府による

干渉政策を適用は、排斥せられ、資本制的商品の海外輸出といふ點から、國際主義的イデオロギーが採用せられるに至つた。この國際主義は、民族主義を基礎としての國際主義であつて、その攻撃者によつて指摘せられるやうに、一のコスモポリタニズムではない。故に、この種の國際主義は、自由主義の發展であつて、民族主義を否定せんとするものではない。かくの如き國際主義者は、資本主義體制における自由平等の觀念を有するものであつて、他國民の文明開化を援助し、期待するものであるから、他國における封建制からの解放を目指す民族運動を支持援助するものである。この種の國際主義が、民族主義と背反の立場に立たず、自由的民族主義といはれる所以である。この場合、後進國においては、その資本主義化によつて不利益を受ける社會層、即ち中小地主・中小商工業者並に保守的貴族の如きは、これに反對する。而して、その反對の理論的基礎を多くの場合、自國の特殊の歴史性に求める。この歴史的特殊性の強調は、民族の特殊性の強調となつて、一の民族主義的立場にゐるものである。それは一の民族的保守主義であつて、普通にロマンテシズムといはれるものである。

民族主義運動によつて、民族國家が形成せられ、その基礎としての資本制生産が發展し來ると、輕工業から重工業への發展となり、國內においては、産業保護主義の採用となり、對外的には、非資本主義的領域（植民地または半植民地國）に對する資本輸出となる。獨占資本主義の段階である。この時代にいたると民族主義は、帝國主義と結合せられ、かゝる利益のイデオロギーとしての役割を勤める。

帝國主義は、二つの状態を生む。第一には、國內における政治的社會的對立の激化である。獨占資本主義にお

る金融資本の優位は一般に認められるが、資本的勢力関係においても、産業資本との対立があり、更らに、本質的な対立者としての労働者階級がある。資本の集中は、これまで比較的安易な生活を送つて来た諸社會層・中小産業者を極度に窮迫化せしめる。また資本主義の向上期にはその知能として優遇された知識階級は資本主義の下降的傾向ことも、漸次労働者的地位に追ひ込まれる。この二つの社會層は、それぞれ、特殊の社會的特性を持つてゐるので、一率に無産者階級として取扱ふことを得ない許りでなく、直に對立的關係にある場合が少くないのである。こゝに社會階級間の關係とその統制の複雑化が存する。第二は、帝國主義國家の世界市場争覇のための對立の激化である。世界貿易及び資本輸出の領域の争奪に關する列強抗争の深化である。

この二つの状態は、同じ現象の二つの面ではあるが、民族主義に對して、大なる變化を與へてゐる。民族主義が最近の傾向において、帝國主義的のものであることは、二十世紀初葉からの事實であるが、民族主義としてのファッシズムの發生はこの現象に新生面を與へた。ファッシズムは大戦後中間階級運動として起つて来たものである。中間階級は、そのイデオロギーにおいて、民族主義的であり、プロレタリアをその階級の基礎とする社會主義・共產主義に賛同するものは、あまりに多くはない。このことは、中間階級の經濟的社會的地位のしからしむるところであるが大戦後におけるプロレタリア運動の興隆に對しては、幾何かの反感をさへ持つてゐたのである。しかし、中間階級の經濟的没落は事實であり、この事實に直面して、何等かの打開運動が起されることは當然である。この運動が諸國におけるファッシズム運動の初期的現はれである。故にファッシズム運動は、その初期においては、社會

主義的または社會政策的要求を持つものである。しかるに、資本主義におけるプロレタリア運動の勃興は、支配的階級に不安を與へ、その勢力の大衆的支持を必要とし、大衆抱合の政策がファッシストに對してなされる。この抱合政策の結果、ファッシズムは、その初期的形態を脱して、後期的形態に入り、獨占資本主義強化のための大衆支持團と化するのである。こゝに至ると、ファッシズムは、その初期における社會的要求を捨て、一意、獨占資本の強化のために國內の統制と國外への發展を工作する。